

# 家庭に於ける諸儀式(承前)

後閑 菊野

其二 誕生祝

## 産所諸式

産所で行ふ事柄は臍の緒を截ること。胞衣を藏めること。湯浴みをさせることなどでございす昔は是等に就いて嚴重な式を行ふことでありました今といへども忽にすべきことではありませぬから参考のためその大様を記して見ませう。

山槐記といふ書物に次のことが載せてございす

治承二年十一月十二日辛未、未二點、皇子安數降誕中略御臍緒を切り奉る先づ御産成り了る即ち小麗安倍資忠を差はし生氣の方の河竹を切らしむ即ち持參す亮、重衡朝臣之を取りて御前に參り竹刀を作り之を進む洞院局練糸を以て御臍緒を結び奉る内大臣竹刀を取り之を切り奉る

臍緒を切ることを容易の人に任せざりしことは右の例のほか一條天皇の中宮上東門院の御産に外祖藤原道長の妻倫子が御臍緒を切りしこと榮華物語に見え又簾中舊記に御あつとつぎ詞を思みて斯くいへるには御産所へ成り候て公方様御胞衣を御つぎ候とあるなどにて知ることがございす

竹刀を用ゐるといふことは風土記に「瓊々杵尊が日向の國に天降りまして土人竹屋守の娘の腹に二人の男子を設け給ひけると其の土地の竹を刀に作りて臍緒を切り給ひける」とある其の蹤を尋ねて今も斯くするなりとのことが書物に記してございす

又胞衣を藏めることに就いては伊勢家秘書誕生の記に

胞衣桶は曲物なり高さ八寸程、口のひろさ七寸ほどに厚く如何にも丈夫に二重のかはにするなり底つよくあるべし、切蓋なり蓋は釘にてしめてよし胡粉にて塗り雲母にて松竹鶴龜を繪にか

とありますのに由つて昔の胞衣桶の作りかたが知られます此の桶を更に杉の木であつく拵へた外箱に入れ然るべき人二人之を携へて吉方に藏めるのでございませすその所には地に穴を掘り四方に石垣を築き其の中に胞衣桶を入れ石の蓋をして置くことのでございませす

臍緒を切ること及び胞衣を藏めることに注意しましたことは右の通りでございませす諸事進歩したる今日に於ては管に其の式を鄭重にするばかりでなく衛生上亦大に注意を要することのでございませす即ち臍緒を切るに用ゐる刀及び其の切口は必ず之を消毒せねばなりませぬ又之を扱ふ人々の身體衣服を清潔にし並に之を結ぶ糸及び繻帶の如きも亦十分消毒を行ふが肝要でございませす若し之を疎略にいたしますと出生の子供が昔所謂臍風即ち嬰兒破傷風といふ恐るべき病にかゝることがあるのでございませす

又胞衣を藏めることにつきまして近い頃まで之を門或は玄關など人の繁く蹈む所を選んで埋めるといふ習ひがありました之は土地及び空気を不潔にする原因となりまして大に清潔法に戻ることのでございませす之は成るべく人里離れた所を選んで埋めるか或は焼き棄てるがよいのでございませす但し胞衣會社などの設ある土地に於ては之に托するが最も簡便でそして安全でございませす

次に湯浴みをさせるといふことについて申しませう小兒が生れて始めて湯浴の式を行ふのを湯殿始といひ種々の儀式がありまして昔は朝廷を始め奉り高位の人の家で行はれたものでございませして徳川將軍家などにも昔の作法は幾分か残つて居つたさうでございませす現今普通には用のないことのでございませすけれども古來儀式の一つとして數へて來たことでありますから序に眞文雜記にある一節を次にしるしておきませう

若君御誕生ありて御産湯をひかを申すとさきを申

すとは御湯めとら頭のかけを御湯にうつしてひか  
 ませ申すなり虎の頭は猛き獸にて諸の獸の恐  
 せ申すことあり虎は猛き獸にて諸の獸の恐  
 る、物にて邪氣を退くる故其の影をうつして御  
 湯をひかせ申すなり又やしをのひしやくを用ふ  
 やしをは唐の菓に椰子といふ木の實あり大さ  
 徑り三寸計わりて圓しそれを二つにわりてひし  
 やくの如く柄をすげて用ふるなり 椰子を併にや  
 子は毒を解す物なるゆゑ産湯に用ひて胎毒を解  
 すためなり中略榮華物語に一條院寛弘五年十月  
 十日上東門院の後一條院を生み給ひし條にい  
 く、御湯殿は讃岐の宰相の君、御ひかへ湯は、  
 大納言の君なり、宮は殿いだき奉らせ給ふ、  
 御はかしに宰相の君、虎のかしら宮の内侍取り  
 て、御さきに参る、御つるうち、五位十人六位  
 十人、御文の博士には、藏人の辨、廣業、高欄  
 のもとにたちて史記の第一の巻をぞよむ、云々

此の時のありさまを古き繪に盡きたるに虎の頭を折敷のやうな  
 る物にのせて女房先だち参る體をふがけり貞丈おもふに丸はき  
 りて用ふるなるべし

産養

貞丈雜記に小兒誕生の當日を初夜といひ三日目を  
 三夜といひ五日目を五夜といひ七日目を七夜とい  
 ふ此の毎日に祝ふを産養の祝といふ其の當日に  
 わらざれば追て吉日を選びて初夜の祝わり三夜五  
 夜七夜も同じ儀なりと記してございまして昔はか  
 やらに度々祝つたものでございすそのうへ七  
 夜に止まらず九夜をも祝つた例がまゝ古書に見え  
 て居りますこのうち一度は其の家で行ふことでご  
 ざいますけれども其の餘はみな主なる親戚或は臣  
 下のうちから之を行ふことになつて居りました然  
 し現今では七夜のみを祝ふことゝなつて居ります  
 そして昔の儀式は何れも皆鄭重に行はれたことは  
 勿論でございますけれども今之を略し當時七夜の  
 祝として適當と認められますものを次に記しませ  
 う

祝式 當日は朝先づ神前を清めて神酒、二重餅な  
 どを供う主人自ら拜禮を行ひ豫て定めおいた幼兒

の名を奉書の折紙にした、めて之を供へ次に再び之を祖先の靈前に供へて拜禮をいたします

産敷飾其の他の準備が整ひましたときは當日招待

しました客を案内して座敷に請じ懇に挨拶を述べ

茶菓を供し客の大かた集つた頃出生の子供に新

調の産衣を着せ傳母或は祖母などが抱いて座敷に

出まして客に對面させるのでございます此の時主人

親ら柵に置いてある名簿即ち生兒の名をした、

めた折紙を取り廣蓋のまゝ客の前に出して披露を

いたします一通りの挨拶が終りましたらば小兒を

退かせ名簿を元の所にかき然る後豫て整へてかい

膳部を出して盃を進めます今次に座敷飾の例

一二を擧げて見ませう

座敷飾 其の一例は假に季節を五月と定めをし

て男兒の誕生祝とし其の二は季節を十一月とし女

兒の祝といたしたのでござります

其一

床飾 右床にて廣さ二間とす

右客位 弓及び箆

正面 鏡

左主従 太刀

柵飾 三重柵とす

上の柵 由緒ある軸物(軸盆に載す)

右の柵 富士形水晶の置物(臺に据う)

左の柵 硯箱 香合

押板 右 熨斗三方

正面 掛物小幅竹に虎

掛物の前に名簿を入れたる廣蓋をおく

左 活花燕子花

其二

床飾 床一間半とす

掛物 陸奥の采女

花 竹に菊

置物 鶴

花と置物との位置は其の形により左右何れに定めてもよろしいのでござります

鏡餅

中央掛物の前におく

棚飾

遠棚とす

上の棚

書物歌書

下の棚

香具一式香燭、香合、香匙立等

押板

梨子地文臺硯箱、色紙、短冊を載す

床柱の方に寄せて名簿を廣蓋に載せおく

當日饗應の獻立は其の家の貧富によつて同じからぬは勿論でございますが其の種類や品柄をよく選んで粗末の事のないやうに注意せねばなりません又客を十分樂しませるやうに接待し之を助ける手だてとして或は餘興を設けることもございませう餘興には謠、琴、ピアノ、オルガンなどの音楽がよろしうございます

宮參

宮參むかしは、うぶすなまゐりと申しました高貴

の人の家で昔行はれました法式の大略を申して見ますれば伊勢家秘書誕生の記などには次のとほ

り記してあります

宮參の法式は參内の如くなり兵具は帯びず守刀乗物の中に入る 中略薙刀二振輿の左右に持つ弓も矢も袋に入れて持つなり神へ進上の物神馬、弓矢、太刀なり 中略神主、幣、神盃を兒に載かせ申すことなり神樂のすむうちは兒、社に居給ふ諸侍 共の所に居る云々

今は時世の變遷にともなひまして弓矢神馬などの奉げものはございませんけれども大體の式に至つてはかはることもございません今次には普通に行はれるものについて申しませう宮參の日限は當今は男子が生後三十二日女子が三十三日目と定めて其の土地の産土神に參詣することとございませうが此の日限はいつの頃からかやうに定めたものでございませうか 誕所記といふ書物には「百日のうち白小袖百一日目、色直しとして産婦、兒並に仕子も色小袖を着す色直しの祝あるべし色直しありて三七日の後吉日次第參宮わるべし」と記してござ

いますし安永將軍の頃の頃も猶生後百二十日以上に

なつて宮參をした例のあるのを見ますれば程遠からぬ時に於ても百日以上を経過して始めて他行させたといふことがわかります之は衛生上最も然るべきこととございます特に今日に於ては乗車をせねばならぬために身体を激動させる恐れがございす故に宮參の日限は古例に従つた方がよろしいこと、おもひます宮參當日は小兒に豫て新調して置いた産衣を着せ傳母之を抱き家の長者或は家族中の然るべき人が之を伴ひ又家々の模様によつては男女數人の婢僕を召し具してゆくこともございますと神社に到着しましたならば其の旨を神主に報じ姓名、生年月などを告げ幣帛料若干を納めまして儀式は總べて神主の指揮に従ふがよろしうございます歸り途には主なる親戚を訪問するが普通でございます

此の小兒に着せませす産衣は通例模様物又は無地紋附でございまして之に白無垢或は相當の下着を重ねます昔は三夜或は七夜の祝に親戚或は臣下な

とから之を贈りますこともございましてが今は大抵生母の里方から贈るが例となつて居ります又宮參の歸り途に親戚を訪問するときは千歳飴と稱へまして長い袋に入れた飴を土産として持参する習はしがございす但し家風によつて他の土産物を持参するも素より隨意でございす又其の親戚の家では犬張子其の他然るべき玩具に麻糸、末廣などを添へて小兒に遣はすが是れ亦一般の習はして御座います(誕生祝完)

▲玩具の選ひ方醫學博士加藤照磨氏(小兒の玩具には彈力のある物が最も宜しい、第一は象牙で造つた玩具、其次は護謨で造つた玩具です、齒のはへ懸つた時代には象牙ほど宜い物はない、象牙は齒ぐきを刺撃して齒の發生を早く致します、及護謨は壞れないうで危険がありま、色を着けてあるアニリン色素を使つた玩具や菓子を入れた下痢を起したりなどして有害である、ゴミも下痢を起すから盛へ落した玩具を警めさせないやう、玩具は必ず能く拭いてやることです『婦人世界』(同題)